

子どもの本だな 37

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

スモールさんはおとうさん

ロイス・レンスキー ぶん・え

わたなべ しげお やく (福音館書店)

スモールさんは、奥さんと三人の子どもといっしょに、丘の上の家に住んでいます。お父さんのスモールさんは毎朝仕事に出かけ、うちではお母さんが掃除や料理をし、子どもたちが手伝います。月曜は洗濯、火曜はアイロンかけ、水曜はうちの飾りつけ、木曜は台所の水漏れを直し、金曜は草刈り。家族はみんなで仕事を分担します。土・日曜は買い物や教会に行き、ドライブも楽しめます。夜寝る前には、お父さんが子どもたちにおはなしを読んでくれます。「おやすみなさい パパ」「おやすみなさい ママ」

仲がよくて働き者のスモールさん一家の一週間が、飾り気のない素直な文章で、温かく描かれます。グレーと青二色の素朴な絵も、安心感を与えてくれます。読んでもらえば2～3歳から楽しめるでしょう。(池田)

やかまし村のこどもたち

アストリッド・リンドグレーン 作

大塚 勇三 訳 (岩波書店)

やかまし村には、家が3軒、子どもは6人。横一列に並んだ家の真ん中、中屋敷にはラッセとボッセの兄弟に妹のリーサ、隣の南屋敷にはひとりっ子のオッレ、反対側の北屋敷にはブリッタとアンナ姉妹が暮らしています。男の子たちは、家の間に張り出した菩提樹の枝をつたって子ども部屋を行き来できました。女の子たちは向かい合う子ども部屋の間に紐を渡し、手紙を小箱に入れてやり取りしました。男の子は、干し草の山の中に洞穴を、茂みに秘密の遊び小屋を作り、女の子たちには野苺を摘むとっておきの場所がありました。

ほかにも、カブラぬきのお手伝いや変装ごっこ、クリスマスの支度など、スウェーデンの自然あふれる村でのびのび暮らす様子が、幼いリーサの言葉でいきいきと語られます。続編に『やかまし村の春・夏・秋・冬』『やかまし村はいつもにぎやか』があります。読んでもらえば5歳くらいから。(池之上)

11月	12月	11・12月の移動図書館(いずれも木曜日です)				
10日	8日	塚森 地域内 10:30~10:50	沖代 地域内 11:00~11:20	福地(三反長) 地域内 14:30~14:50	米田 公会堂 15:00~15:20	竹広南 公民館 15:30~15:50
17日	15日	岩見構下 公民館 10:30~10:50	岩見構上 公会堂 11:00~11:20	原池団地 公民館 15:00~15:20	山田 掲示板前 15:30~15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00~16:30
24日	22日	広坂 公民館 10:30~10:50	上太田 公民館 11:00~11:20		吉福 公民館 15:30~15:50	太子 ニュータウン 公民館 16:00~16:30

お知らせ

登録の更新をお願いします
図書館では、3年ごとに、氏名、住所、電話番号などの確認と、利用カードの更新を行っています。「利用カード申込書」に記入し、住所氏名が確認できるもの(健康保険証、運転免許証、学生証など)とともに、カウンターの図書館員に提出してください。

『伊勢屋稲荷に犬の糞 江戸の町は犬だらけ』

仁科 邦男著

草思社

255 頁

2016 年 8 月刊

1,500 円

(請求記号) 210.5

語呂のよい「伊勢屋稲荷に犬の糞」。少年時代、円生の「鹿政談」でこの言葉を覚えた著者は、新聞記者になり、資料の中で再会すると、ひっかかるものがあった。円生は、江戸の名物の一つに犬の糞を挙げていたが、江戸には本当に犬の糞が多かったのか。著者は膨大な資料にあたり、江戸の犬事情を調査した。江戸の初め、町では「犬というものをほとんど見かけなかった」と当時の軍学者が語っている。人々は、体が温まると犬を見かけ次第食べてしまったようなのだ。宣教師フロイスは、日本人は「家庭薬」として犬を食べると述べている。三代将軍家光時代の書物『料理物語』には、七つの獣料理の一つに犬料理が入り、徳川光圀は「味のために鶏犬を殺し、食うこと、これは大いなる不仁である」と犬食いに触れている。

明暦の大火で犬猫も多く焼死した。復興景気の人々の暮らしが良くなると、町の犬は食べ残しを与えられ、犬は次第に増えていった。この頃発明されたのが大八車。資材運搬で駆け抜ける車に犬が轆かれ死亡する事故が相次いだ。五代綱吉は、犬をひいたら処罰するとした町触れの中で「…生類あわれみの志を肝要にして」と続け、犬の保護のため中野に犬小屋まで作らせた。町犬は犬駕籠に乗って運びこまれ、白米を与えられていたという。「名もない犬たちが、どのように暮らし、生き、死んでいったか。忘れ去られ、顧みられないこともない犬たちの歴史を、犬に成り代わって書きしるしておきたかった」著者のひたかたならぬ犬への愛情が伝わってくる。

(片木)

カレンダーの×印は休館日。
開館は 10 時～18 時。
金曜日は 20 時まで開館。

11月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
		×	2	3	×	5
6	×	×	9	10	11	12
13	14	×	16	17	18	19
20	×	×	23	24	25	26
27	28	×	×			

12月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	×	×	7	8	9	10
11	12	×	14	15	16	17
18	×	×	21	22	23	24
25	26	×	28	×	×	×

講演会のお知らせ

「長くつ下のピッピとニルスの国 スウェーデンの暮らしと文学」

長く厳しい冬と、花々がいっせいに咲き乱れる短い夏。スウェーデンの風土、暮らし、文学についてお話いただきます。

講師：横野菜々さん

日時：12月18日(日)

14時～16時

会場：図書館 読書会室

対象：高校生以上(40名)

※申込は11月9日から受付。

地下水

十月半ば、信号待ちの車中で、陽を浴びた稲に見とれ、青信号が恨めしかった。女主人に世界で一番美しいものを持ち帰るように命じられた船長が、世界中を巡り持ち帰ったのが、黄金色の麦だったという昔話を思い出した。麦が豊かになれば生活も潤うという船長の思いは子どもの頃にも分かったが、一面に広がる麦の美しさは感じる事ができていなかったように思う。昔話がやっと自分のなかに納まったよううれしい。

暑さに負け、二度寝に充てていた時間に、散歩を再開した。稲刈りが終わった田んぼでキツネがシラサギを追って、飛び跳ねていた。シラサギは、キツネが届くか届かないかの高さをクルクルと回っている。キツネは獲物としてサギを追っているのか、サギは逃げるつもりなら高く飛べるだろうから、遊んでいるのか、それとも腰が抜けて飛べないのか？立ち止まって二匹を眺めていると、キツネが気づいて逃げてしまった。稲刈り後のほのかに甘い香りを楽しみながら、散歩を続けた。

苦手な冬が近づいてきた。「冬は空気が澄みきって気持ちがいい。」と他県に越されたYさんの声がある。その季節特有の空気、香り、情景がある。それらを楽しみながら冬を乗り切るぞと構えている。

(竹内)

